
兄妹

K

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄妹

【Nコード】

N0493L

【作者名】

K

【あらすじ】

「大好きなお兄ちゃん…」

「大好きな妹…」

「わたしは…」

「俺は…」

「「幸せだった。」」

お兄ちゃん（前書き）

兄妹。

前編です。

どうぞ。

お兄ちゃん

先日、わたしは大好きなお兄ちゃんの元を去った。

一緒に笑ったお兄ちゃん。

一緒に泣いたお兄ちゃん。

一緒にケンカしたお兄ちゃん。

どうか…お幸せに。

わたし達兄妹は、途中から離ればなれになった。

お父さんとお母さんが事故で亡くなったから……

わたしとお兄ちゃんは別々の親戚の人に預けられた。

それはわたしが小学校4年生に、お兄ちゃんが高校1年生になりたての頃だった。

わたしはお父さんとお母さんが死んでしまったのが悲しくて、ずっと泣いていた。

わたしを引き取った叔父さんと叔母さんはそんな私に冷たかった。毎日のように疫病神と言われた。

そしてある日、わたしは違う親戚の人に預けられた。

この人達も冷たかった。

食べ物も明らかに皆と違うし、一緒にテーブルで食べさせてもらえず、ずっと床で食べていた。

そしてまた他の親戚の人に預けられた。

この人達もまた、冷たかった。

わたしがちょっとした失敗をするだけでぶたれた。

そして今度は最初にわたしを引き取った親戚の人に預けられた。

そんなことを何度も…何度も繰り返された。
毎日が苦しかった。

お兄ちゃんに逢いたい。
逢いたい逢いたい逢いたい逢いたい逢いたい逢いたい。
そればかり考えていた。

ある日…お兄ちゃんから電話がかかってきた。
高校を出て就職をしたらしく、わたしに「一緒に暮らさないか」と
言ってくれた。

わたしは嬉しくて嬉しくてワンワン泣いた。
わたしが中学校1年生の時だった。
それからの毎日はとても楽しかった。

アパートはお風呂が無いほど古いものだったし、ひとつの部屋しか
無かったけどわたしにはそれで十分だった。
高校に進学し、わたしはアルバイトを始めた。

その年の父の日、わたしはお兄ちゃんにネクタイをプレゼントした。
お兄ちゃんは「なんで父の日…」と笑ったけど、わたしにとって
は中学1年のあの時からお父さんでもあったんだよ。

わたしはお兄ちゃんにネクタイを着けてほしいとお願いしたけど、
照れくさいらしく着けてくれなかった。

わたしがふてくされて頬を膨らませると優しく頭を撫でてくれた。

わたしは…もういない。

お兄ちゃんにわたしの為に色々頑張ってくれた。
自分のことなんか2の次だった。

だから…これからは自分の好きなように生きてね。
それが…わたしの願いだよ？

お兄ちゃん（後書き）

いかがでしたでしょうか？
後編をお楽しみに。

妹（前書き）

兄妹後編です。
どうぞ。

妹

先月、妹が死んだ……

一緒に笑った妹。

一緒に泣いた妹。

一緒にケンカした妹。

お前は…幸せだったか？

俺と妹は途中から離ればなれになった。

親父とお袋が事故で死んじまったから。

俺と妹は別々の親戚に預けられた。

俺は父方、妹は母方の親戚に。

俺が高校1年に、妹が小学校4年になった頃だった。

2人とも引き取ってもらえたのはよかった。

だが、他人を引き取るのだから受け入れがたい部分も多々あったと思う。

俺は高校生だったし、その辺は重々承知だった。

だが、小学校4年と幼い妹にとってはとても辛いだろう。

そんなことを考えていたある日。

俺を引き取ってくれた親戚夫婦が、俺の妹は親戚をたらい回しにされているのではないかと話しているのを聞いた。

俺はいても立つてもいられず、妹を引き取った親戚に電話をかけた。すでに妹を他の人に預けたと言われた。

なんでちゃんと面倒を見てくれなかったんだと聞いたら、大人には大人の事情があると怒鳴られて電話を切られた。

それから毎日、辛い目にあってないか？泣いてはいないか？
そんなことばかり考えていた。

高校を卒業し、就職をした頃、俺はボロいアパートを借りて1人暮らしを始めた。

高校生の時からアルバイトをして、ある程度金もあつたから大丈夫だった。

それから俺は必死に妹を探した。

やっと連絡がつき、俺は妹に「一緒に暮らさないか」と聞いた。

妹はワンワン泣いて喜んでくれた。

それからあのボロアパートで妹と一緒に暮らし始めた。

風呂も無く、部屋も1つしかないような部屋だから、妹はここを気に入ってくれないんじゃないか？と心配だったが、そんな仕草は無かったからよかった。

妹は高校に上がると、アルバイトを始めた。

「アルバイトで稼いだ金は自分で好きに使っていい」と言ったのに、妹は頑として受け入れず、ほとんど生活費に当ててくれた。

そんな年の父の曰。

妹は俺にネクタイをプレゼントしてくれた。

「なんで父の日に…」と俺は苦笑して言ったが、妹は意味あり気に「えへへ…」と笑うだけで何も教えてくれなかった。

妹はネクタイを着けてほしいと言ってきたが、照れくさくて着けられなかった。

ふてくされる様に頬を膨らませる妹の頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細めた。

こんな日がずっと続けばいいと思っていた。

だが、次の日に妹は交通事故に巻き込まれて死んだ……

幼い頃に両親を亡くし、親戚に辛い目にあわされ続けた妹。

これから幸せな日々がずっと続くと思つた矢先。

あまりにも辛すぎる。

葬式の席で、妹をたらい回しにした親戚の奴らが俺のもとに来て、

「惜しい子を亡くしたね」と言ってきた。

俺は怒鳴った。

「何故そんなことが言えるんだ!!」

「アンタらにそんなこと言える資格あるのか!？」

「そんなこと言うならなんで妹をたらい回しにしたんだ!？」

俺が怒鳴ると気まずそうに去っていった。

俺の大切なたった1人の妹。

俺はお前が死んだと聞いてから、何故か涙を流せなかった。

だが、この前、お前の遺品を整理していたら、お前からの俺宛の手紙が見つかった。

それを読んだ後、俺は年甲斐もなく声を上げて泣いた。

多分、この瞬間にやっとお前が死んだのを受け入れられたのだろう。

1ヶ月もかかっただけだな…

拝啓、親父様・お袋様。

先に逝った妹をお願いします。

俺はまだまだこっちにいます。

妹の分まで。

拝啓、妹。

俺はお前と一緒に暮らせてとても幸せだった。

だから、そっちでは俺のことを気にせず暮らしてくれ。

俺も、何十年後にはそっちに逝くから。

……その時は、また仲良くしてください。

妹（後書き）

いかがでしたでしょうか？

こんな私の駄文にお付き合い頂き、ありがとうございます。
次で兄妹は完結となります。

妹からの手紙（前書き）

兄妹最終話です。
どうぞ。

妹からの手紙

お兄ちゃんへ。

直接口に出して言うのは恥ずかしいから手紙にしました。

変かな？えへへ……

お兄ちゃん、ありがとう。

お兄ちゃんがわたしと一緒に暮らさないかって言ってくれて、ホントにホントに嬉しかったんだよ。

お兄ちゃんだって辛かったはずなのにわたしなんかと一緒にいてくれて……

わたし、今すっごく幸せだよ！！

だからね、お兄ちゃん。

今度はお兄ちゃんが幸せになつてね。

絶対だよ！？

わたしは……お兄ちゃんは世界で1番のお兄ちゃんだと思ってるからね。

あと、お父さんだとも……

父の日にお兄ちゃんにネクタイをプレゼントするなんておかしいよね？

でも、お兄ちゃんとわたしが一緒に暮らし始めたあの時から、お兄ちゃんはわたしのお父さんでもあったんだからね。

授業参観にも来てくれたし、体育祭や文化祭にも来てくれた。

お父さんとお母さんが死んでから寂しくて仕方がなかったそうだった日々が楽しくなったんだよ。

これからも、お父さんみたいなことしてくれるのかな？

もし、わたしに彼氏とか出来て、家に連れてきたら複雑な顔とかしてくれるのかな？

わたしが就職して、家を出ることになったら本気で心配してくれる

かな？

…とか期待しちゃったりして（笑）

お兄ちゃん。

これからもいっぱい思い出を作ろうね。

これからも、よろしくお願いします。

そして、ありがとう。

今、わたしはとっても幸せだよ！！

妹からの手紙（後書き）

いかがでしたでしょうか？

私の初投稿作品は。

感想などを頂ければ、とても嬉しいです。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0493/>

兄妹

2010年10月9日19時21分発行